

☆被災地の歴史資料・文化財の保全、震災の経験の記録化と保存!!
 ☆幅広いネットワークづくりを通じて、歴史・文化を復興に活かす!!
 ☆被災地から全国へ、歴史学と社会をめぐる普遍的な課題へ!!

史料ネット NEWS LETTER

第10号 1997年10月27日(月)

発行 歴史資料ネットワーク(神戸大学文学部内)
 TEL078-881-1212(内線4079), FAX078-803-0486

目次	
「清盛と福原京の時代」成功裡に終わる…	1
参加者の感想文から…	2
ボランティアの市民講座参加記…	3
新聞記事より…	5
神戸市に要望書提出/文献情報…	6
「猪名荘遺跡を学ぶ会」学習会のご案内…	8
“News Letter” 郵送購読受付のお知らせ…	8

第7回市民講座「清盛と福原京の時代」、成功裡に終わる!!

震災復興・歴史と文化を考える市民講座(第7回)

「清盛と福原京の時代 被災地神戸の歴史をふりかえる」

日時 1997年9月13日(土)午後1時~5時
 場所 神戸市東灘区・御影公会堂
 主催 阪神大震災対策歴史学会連絡会(歴史資料ネットワーク)
 共催 神戸史学会
 後援 神戸市教育委員会、兵庫県教育委員会

講演 「平家物語の時代と神戸」 永井路子氏(作家)
 関連報告 「福原京の再現」 足利健亮氏(京都大学教授、歴史地理学)
 「地中から語る清盛の時代」 須藤 宏氏(神戸市教育委員会学芸員)
 スライド「清盛の時代と現代をつなぐ」 史料ネット
 パネルディスカッション 講演者・報告者その他

参加者 462名 募金総額 7万904円 記録集等売り上げ 1万4,800円

★今回は、来場者の皆さんに募金をお願いし、多くの方からご協力をいただきました。
 ☆永井さんはじめ、ボランティアとしてご協力いただいた講師の方々、ならびに募金にご協力いただいた皆さまに、お礼申し上げます。どうもありがとうございました。

去る9月13日(土)、震災復興・歴史と文化を考える市民講座(第7回)が、神戸市東灘区の御影公会堂で開催された。ファッションな近代都市というイメージを押し出して、文化遺産のリストラを強めようという震災後の動向に対し、「清盛と福原京の時代」をテーマに、神戸の前近代史が持つ魅力を市民にアピールしようというのが、今回の目的である。作家の永井路子さんがボランティアで来演するとあって、参加申し込みが殺到。やむなく往復ハガキによる抽選となった。

まず導入として、「清盛の時代と現代をつな

ぐ」と題するスライドを上映。地元で「清盛塚」と呼ばれている鎌倉後期の十三層石塔をはじめ、市内に残る文化遺産をおりまぜながら、史料ネットの活動や古代~近代の神戸の歴史を概観した。

続いて「平家物語の時代と神戸」と題する永井さんの講演。女性にポイントをおきながら清盛の人脈や経済基盤が、イメージ豊かに語られた。特に海上輸送に象徴される民間活力を政権に直結しようとした福原京の構想が、頼朝の鎌倉、家康の江戸に継承されたというユニークな

(2頁に続く)

史料ネット活動支援募金 (郵便振替)
 名義 阪神大震災対策歴史学会連絡会 口座番号 01090-7-23009

指摘は、新鮮な感銘を聴衆に与えた。

その後、足利健亮氏（歴史地理）と須藤宏氏（埋蔵文化財）が報告に立ち、福原の範囲や新都の条坊プラン、清盛の福原山荘の可能性もある祇園遺跡の発掘結果などを、具体的かつ明快に語った。最後は復興・街づくりと、地域の歴史や文化財の関係を考えるパネルディスカッション。時間の制約で十分な議論ができなかったが、永井さんが地元鎌倉を引き合いに出しながら、先人の営みを再生するための歴史資料や文化財が、地域社会にとって如何に重要かを力説されたのが印象的であった。

会場が満杯のうえ歴史的建造物のため冷房がきかないこともあり、講演会としてはかなりきつい環境だったが、参加者は最後まで熱心に聴き聞いていた。来場者（カウント分）は、462名。会場に展示した被災史料救出などのパネルも好評で、カンパも7万円ほど集まり、シンポ記録集なども約1万5千円の売り上げがあった。

（文責・藤田明良）

参加者の感想文から

☆当日参加された方からの感想文の一部を、ご紹介いたします。順不同。

★掲載にあたって、部分的に編集している場合があります。ご了承ください。

海津節子さん：はじめて参加させて頂きました。神戸で生活して30年余り、その間、大半を荒田神社付近で過ごしました。遺跡現地説明会にも参加させて頂きました。本日の講演がより身近な処であっただけに、大変興味深く聴講させて頂きました。永井さんの小説家としての歴史の考察、表面的な通り一遍の解釈しかない私には、興味深いお話でした。

勝部航吉さん：歴史遺産を大切に保存、維持管理するためにも、繰り返し色々な形で啓蒙することが必要と痛感する次第です。文化を大切にすることは掛声だけでなく、税制面でもバックアップするなど具体化する必要があろう。講座をシリーズでぜひ続けていただきたい。

清田純男さん：若い頃から歴史に興味がなく、学生時代も苦手科目でしたが、カメラの趣味に熱が入るにつれ「歴史」を知っておればという

残念な思いが度々出て来ました。そういう「うつうつ」とした気持ちの中での大地震。今回初めての市民講座参加でしたが、遅まきながら生まれ育った土地の過去を勉強したいと思います。多田由宇子さん：身近な所でよく発掘作業を見る機会があったが、今回の講座を受けて、歴史的な重要性が理解出来たように思います。今後の生活につながる学問であることも感じました。新しい発見がありましたら発表して下さい。それが思い切った意見でも、良いと思います。住吉村周辺のことも聞きたいです。

長濱かず美さん：震災により家が全壊し、心身共に疲れ果てましたが、幾分ほっとした時に招待状をいただき、市民講座に参加させて頂いております。いにしえの世界を垣間みるように、永井先生のお話に聞き入りました。区画整理もなかなか進まない状態なので、今後の生活設計もまだまだですが、少し視野を広げて、今後の神戸の発展を市民の立場で考えたいと思います。古文書もわずかながら協力できたかなと思っております。震災を一つのバネにして、将来に向かって進みたいと思います。

花木叶滋さん：こういう歴史を中学校の教材にして教えると、受験オンリーの詰め込み教育の改善になるので、神戸市が率先してやったらよい。勿論六甲山の歴史や、源氏物語や大和物語なども加えてほしいし、三菱造船のストヤ川崎重工の栄光、鈴木商店の倒産、酒造業者が船舶業・銀行業・私立学校経営にも手を出していった経過も載せ、国際人の会社も加える（モロゾフやゴンチャロフなど）。移民を送り出したり、捕鯨船の出入りなど神戸の歴史は面白いと思う。

森田節子さん：永井先生の話、歴史を勉強し振り返る上で方向付けが得られました。中学生の時に大輪田の泊などについて勉強しましたが、現在はどうなっているのでしょうか。当時の記憶がよみがえり楽しく、また機会があれば受講したい、こういった話題について子供とも話し合ってみたいと思います。職場にいた頃、他府県からの訪問者に少しは歴史を話せたことを思い出し、懐かしく思いました。神戸市の歴史シリーズ、各区ごとの歴史紹介などを希望します。

森端知子さん：スライドは興味深かったが、説明の方はプレゼンテーションの仕方を工夫して、もう少し聴衆の興味を引くようにしてほしい。永井さんの講演は今回の目玉だけに大変良かった。

満席の盛況ぶりであった。会場の大きさの関係上、事前に抽選が行われたそうであるが、やむを得ないこととはいえ、惜しいことであった。結果論かもしれないが、十分広い会場を確保するため、参加費を徴収した方がよかったと思う。

福原京に焦点をあてたテーマの設定は、成功であった。わずか半年足らずの都ということもあって、藤原京や平城京などとは異なり、ほとんど地上にその痕跡を残さない福原京は、注目されることは少ない。地元の神戸市民でさえ、かつて都があったということを知らない人が多かったのではないだろうか。私自身も、恥ずかしながら遺跡として意識したことはなかった。

そこへ今回、清盛の妻・時子を題材とした「波のかたみ」など多くの著書がある永井路子氏が熱く語り、足利健亮氏は『玉葉』などの史料から推定した具体的な南北軸の都城計画図を示し、須藤宏氏は地中から、その痕跡を見いだせることを報告した。今回の講座の参加者は、神戸が古い歴史を持ち、多くの歴史遺産を持つ地域であることを再認識することができたはずである。

また、講演の前後の説明や、壁にはられたパネル展示などによって、一般市民に対し、史料ネットの活動の宣伝・啓発にも大いに役立った。多く集まった募金は、市民の理解が得られた結果であり、講演会の成果を示してくれた。

史料や文化遺産の保全を直接扱った講演会も重要であるが、専門家だけではなく、多くの市民にも史料ネットの活動を理解してもらえるよう、今後も地域の歴史など一般市民の関心を喚起するテーマを設定し、著名な文化人による講演会を開催することが必要であろう。

ボランティアの市民講座参加記③

樋口健太郎（神戸大学文学部大学院生）

私は今回の市民講座の準備段階から参加させていただいた。また講演中もスライド投影などの役を承っていたので、客観的なかたちでこの講座に参加したとはいいがたいが、私自身、史料ネットの活動に参加させて頂くのが、神戸大学文学研究科に進学した今春以来であり、これまでに感じたこと学んだことを踏まえた上で、今回の講座について若干の感想を述べてみたい。

今回講演されたのは、作家の永井路子氏、考古学の須藤宏氏、歴史地理学の足利健亮氏の三

氏である。講演の後にはパネルディスカッションがあり、高橋昌明氏を司会に永井・須藤・足利の三氏ならびに奥村弘氏・大国正美氏が意見を述べられた。会場には老若男女を問わず、多くの市民の方々が集まった。今年のNHK大河ドラマ『毛利元就』の原作者でもある永井氏の知名度もあるのだろう。しかし、こうした阪神大震災復興に関わった、言わばかたいイメージのある市民講座にこれだけ多くの人々が参加され、また永井氏の講演のみでなく、最後のパネルディスカッションまで静聴されたことは、特記すべきと思う。

永井氏の講演にしても、題目は「平家物語の時代と神戸」というものであったのだが、内容は単に『平家物語』に描かれた平家の栄華物語や英雄譚だったのではない。あの震災を経て、果たしてこの地域の市民の共有するアイデンティティは何処に求められるべきか、ということが問われていたのだと思う。スライド上映やディスカッションで奥村弘氏が述べられていたことであるが、とくにこの地域の歴史が、戦前楠公として湊川神社に祀られた楠木正成をはじめとして皇国史観に強く結びついていることも理由の一つとして、神戸市は戦後、明治以降の外国に開けた都市としての、ある意味で清新な都市のイメージをつくりあげてきた。しかし、震災を経て、再び街を復興させてゆく、その街づくりの上で、もう一度自らの生活する地域を見つめ直してゆくとき、我々の地域がどのように地域として成り立ってきたのかを知り、行政ではなく地域に生きる人々が地域のことを真剣に考えはじめの段階が来たのだろう。今回の講座に、とくにこの地域に生活される多くの人々が参加されたのは、永井氏の講演をはじめとして、今回の講座が、こういった希求に充分応えうるものであったからと理解する。

被災地域における歴史を住民自身が見つめ直してゆくことは、この地域の歴史資料や文化財を守ることに当然繋がるわけだが、史料ネットの活動自体についても、地域のこうした要望があるなら、まだすべきことが沢山ありそうである。加えて、今回は市民講座というかたちではあったが、より多くの地域の人々がこうした史料保護活動についてもっと認識し、単に研究者がリードするのではなく、地域住民による地域の活動とされる必要がある。

神戸市に被災史料保全および 震災資料保存を要望

1997年9月24日（水）午前中、阪神大震災対策歴史学会連絡会名で、神戸市に対して、被災歴史資料保全と震災資料保存を求める要望書を提出しました（要望書全文は次頁をご覧ください）。当日は、代表幹事の奥村弘、京都民科から上野輝将神戸女学院大学教授、さらに神戸大学の高橋昌明教授、坂江渉助手が、神戸市の文化財課の課長に要望書を手渡すとともに、一時間ほどその内容について懇談しました。

結果明白になったことは、歴史資料保全については、文化財課としては、価値が定まったものに対してはそれなりに対処できるが、そうでないものについては対応できないといいうことに終始したことです。こちらからは、歴史資料として価値があるかどうかは、まずしっかりとした調査と、一時的な保管がどうしても必要なこと、また震災という事態のもとでの緊急の活動であることを訴えましたが、倉庫代わりに市民から史料を預かることはできないなどの意見を繰り返し述べる形で、議論はそれ以上前に進みませんでした。

ただ保全活動を行うにはどの程度の費用がかかるのかなどとの私たちの側への質問もあり、今後継続して要望していく必要性を感じました。

震災資料については、被災史料以上に深刻です。他市での取り組みを紹介しながら懇談したのですが、現在のところ神戸市にはこの課題について担当する部局がなく、文化財課から復興本部に伝えておくとのことで、それ以上の対応を引き出すことはできませんでした。

なお、その日午後4時30分から、要望書の提出と懇談の内容について神戸市役所で記者会見を行いました。翌25日付けの読売新聞および毎日新聞（いずれも神戸版）が記事載せています。

被災史料保全および震災資料保存について神戸市は、これまでも県や他の自治体にくらべて異常なほど冷淡な対応を取っています。史料ネットとしては、最大の被災自治体である神戸市での活動をすすめるながら、今後もねばり強く神戸市への要望を続けていきたいと考えています。

（文責・奥村弘）

被災歴史資料の保全
整備など求め要望書
神戸市に震災対策
歴史学会連絡会
神戸大史学研究会など8
団体でつくる「阪神大震災
対策歴史学会連絡会」（代
表幹事、奥村弘・神戸大助
教授）は24日、震災で被災
した歴史資料の保存体制の
整備などを求めた要望書を
神戸市に提出した。

同会によると、震災で多
くの歴史資料に被害が出た
が、約1万点にのぼる貴重
な資料を救出、保全するこ
とができた。しかし復興と
ともに廃棄、行方が分から
なくなっている資料は増大
し、早急な保全体制の整備
が求められているという。

要望では、保全された資
料を保管し整理、公開する
ための体制を整備する▽震
災にかかわって作成された
行政文書を保存、公開する
とともに、民間で作成され
た資料の調査、収集を担当
する部局を設ける――な
ど。

1997年9月25日付 毎日新聞神戸版より

- ○ - ○ - ○ - ○ - ○ - ○ - ○ - ○ - ○ -

■文 南大 幸良

- 寺田匡宏 「復興と歴史意識—震災記録保存運動の現在—」『歴史学研究』701号 1997年9月
北泊謙太郎 「歴史資料保存と歴史学の間における問題とは—「阪神・淡路大震災と歴史学 パート
II」の報告・討論をめぐって」『日本史研究』421号 1997年9月
佐賀 朝 「被災史料救出活動の成立・展開とその条件」『歴史科学』（大阪歴科協）150号
1997年9月

(神戸市に提出した要望書)

神戸市長笹山幸俊殿

1997年9月24日

阪神大震災対策歴史学会連絡会
代表幹事 奥村弘
構成団体 神戸大学史学会
神戸女子大学史学会
大阪歴史学会
日本史研究会
大阪歴史科学協議会
京都民科歴史部会
歴史学研究会
歴史科学協議会

被災歴史資料の保全および震災資料の保存を求める要望書

震災後、私たち歴史研究者は、関西地域の歴史学会を中心に阪神大震災対策歴史学会連絡会(歴史資料ネットワーク)を組織して、神戸市をはじめとする各自治体と協力して、被災家屋からの歴史資料の救出など、被災地における歴史と文化遺産の保全のための活動を続けてきた。神戸市内においても、神戸市文書館や神戸市立博物館など貴市の機関と協力して救出活動を展開した結果、一万点以上にも上る貴重な歴史資料を救出・保全することができた。しかしながら、これらの活動は、歴史資料全体の被害状況に比して十分なものとは言えず、被害状況の調査でさえ被災地全体をカバーできていないのが実状である。阪神大水害や神戸空襲をはじめとする多くの災害を乗り越え、保存されてきた貴重な歴史資料が、復興とともに廃棄され散逸していくという状況はさらに拡大しており、神戸市域における地域の歴史を語る貴重な財産が残されるかどうかという深刻な事態はますます切迫してきている。

しかし、神戸市にはこうした歴史資料を調査、保全し、公開していく体制がまったくない。そのため他の被災自治体と比較しても、神戸市域における歴史資料の保存には大きな制約がある。至急、市内全域の歴史資料を悉皆調査し、神戸市文書館などの施設に、こうした史料群を受け入れ、保管していく体制を整備することが必要である。

一方、今回の震災は、それ自体が現代都市を直撃、壊滅させた歴史的な大地震であり、その実態を示す膨大な資料・記録・映像などが後世への貴重な遺産となることは言うまでもない。また、震災後、神戸市などの被災自治体をはじめ、多数のボランティア団体や企業、個人などが被災者の救援や復興のために様々な活動を展開し、その過程では行政・民間を問わずおびただしい量の記録や資料が作成されている。兵庫県をはじめとするいくつかの自治体では、すでにこうした震災資料の調査・保存事業に着手している。

しかしながら、神戸市では、自治体として自らが作成した行政文書について保存措置がとられ、民間所在の様々な団体や個人が作成した資料に至っては、その調査・収集や保存の必要性についてさえ、ほとんど考慮されていない。このままでは防災のために震災の実態を基本的な事実に基づいて調査・研究することも、被害の実態や人々の震災体験、復興への営みなどを後世に伝えていくこともきわめて困難になるであろう。さらに国際的に見ても、この震災から教訓を得ようとする人々の期待にこたえることができなくなるであろう。

神戸市はすみやかに、自らが震災に関わって作成した行政文書の保存を図ることはもちろん、民間に所在するさまざまな資料についても、これを保存していく仕組みをつくることも不可欠である。またそうした震災資料の保存とともに公開・利用のための体制をつくることも避けることのできない責務である。

私たちは、以上の被災歴史資料の保全と震災資料の保存のため、下記のような具体的措置を貴市がとられることを強く求めるとともに、その企画・実施にあたって協力を惜しまないものである。

一、震災後の復興の中で散逸のおそれのある歴史資料を保全するため、神戸市域における歴史資料について悉皆調査を行うこと。そこで保全された史料を受け入れ、保管し整理・公開していくための体制を整備すること。

一、被災地の中の最大の自治体として、今回の震災に関わって作成された行政文書を恒久的に保存し公開するための施策をとること。また民間で作成された震災に関わる多様な資料の調査・収集を担当する部局等を設け、その公開・利用も含めた保存体制を整備すること。

以上

注目を集める猪名荘遺跡、最新の成果を紹介!!

「猪名荘遺跡を学ぶ会」学習会のご案内

日 時：1997年11月29日（土）午後1時30分～4時30分
会 場：尼崎市潮江公民館（JR尼崎駅北口下車、北へ徒歩5分）
尼崎市潮江2丁目4-40、TEL 06-499-0848）
報 告：田中文英氏（大阪女子大学）
「猪名荘の歴史について」
渡辺 昇氏（兵庫県埋蔵文化財調査事務所）
岡田 務氏（尼崎市文化財収蔵庫）
「猪名荘遺跡の発掘調査の成果について」

参 加：どなたでも自由にご参加ください。参加料無料。

私たち史料ネットは、昨秋以来、「被災地の遺跡を考える見学会」と銘打って、市民・住民の方々とともに震災被災地域の様々な遺跡を継続的に訪れ、それをめぐる現状についての認識を深めてきました。「猪名荘遺跡」も、「見学会」がとりあげた遺跡のひとつで、東大寺の荘園に関連した施設跡と想定される柱穴等が発見され、新聞誌上でも報道されたことはご存じのとおりです。この「学習会」は、「見学会」もひとつのきっかけとなって、遺跡のある尼崎市潮江地区の住民・市民の方々の集まりである「猪名荘遺跡を学ぶ会」とともにおこなうものです。残念ながら、遺跡じたいは地区の復興事業との関係で埋め戻されてしまいましたが、「学ぶ会」は、潮江の新しいまちづくりのなかで、発掘調査を通じて明らかにされてきた猪名荘遺跡についての記録・情報を何らかのかたちで具体的に生かし、遺跡を地域全体の記憶とし財産としていきたい、そのようなかたちでの遺跡の「保存」を実現させたいという思いから発足しました。今回の学習会の趣旨は、そのため

の足がかりとして、まずは遺跡じたいの具体的な

様相とその歴史的意義についての理解・認識をより深め、また地域内外に広めていこうというものです。当日は、文献史の側から猪名荘の歴史的意義を、潮江地域の特色・特性との関連で大阪女子大の田中文英さんからお話しいただくとともに、発掘の現場からということで、兵庫県教委の渡辺昇さん、尼崎市教委の岡田務さんのお二方に、発掘調査のなかで発見された遺物の公開・遺跡のスライドの上映を含めたお話をいただくことになっています。思えば、「被災地の遺跡を考える見学会」は、住民・市民の方々と、在野の研究者、発掘調査・文化財行政の相互の間を連絡しつつ被災地の遺跡のあり様を認識し、そのなかから遺跡保存の道をなにごしかのかたちで見いだしていきたいという趣旨で続けてきました。その意味で、今回の学習会と今後も引き続いていくであろう「学ぶ会」との連携活動は、まさに「見学会」の一環であり、「見学会」が趣旨どおりに発展したかたちとして位置づけることができるでしょう。皆さま、積極的にご参加ください。（文責・井上勝博）

— φ — φ — φ — φ — φ — φ — φ — φ — φ —

■“News Letter” 郵送購読受付のお知らせ

1997年度の郵送購読申込みを受け付けます。ご希望の方は送料500円を添えてお申し込み下さい。
◇振込口座 郵便振替 01090-7-23009 名義 阪神大震災対策歴史学会連絡会
◆募金口座と同じ口座ですので、かならず「“News Letter” 郵送購読希望」と明記してください。
募金と同時に振り込まれる場合は「“News Letter” 郵送購読料含む」と明記してください。

史料ネット NEWS LETTER No. 10 1997.10.27 (月)
編集・発行 歴史資料ネットワーク 〒657 神戸市灘区六甲台町1-1
神戸大学文学部内 TEL. 078-881-1212 (内線4079)
FAX. 078-803-0486 e-mail yfujita@lit.kobe-u.ac.jp